

(1999.3 所外版)

「レーザー研シンポジウム 99」開催さる

高部英明

レーザー核融合研究の推進には高出力、高効率のレーザー関連技術から、爆縮、高速点火、X線レーザーから炉工学まで幅広い理工学の研究が要求される。爆縮プラズマを取ってみても、複雑流体、非平衡原子過程、強結合プラズマ、核反応粒子輸送、はたまた、超高強度レーザー（強度 $10^{20}\text{W}/\text{cm}^2$ ）、爆縮プラズマの相対論的非線形相互作用と、嬉しくなるほど難問が山積みされている。さらに、これらの研究成果を多次元爆縮コードに取り込んでいかねばならぬと考えていくと、米国リバモア研が1700人の人員で取り組んでいるレーザー核融合を中心とした研究をレーザー研がどう取り組むかは難題である。「一点突破全面展開」などと言っても、限界があるのではなかろうか。

上記の意味において共同研究の重要性が浮き彫りとなる。当センターの手の届かぬところを共同で補っていただき、同時に、センターの活動が皆様に少しでも役に立てれば利益を共有しうるはずである。

恒例の共同研究シンポジウムが2月9日、10日と開催された。学内、外より96名の参加を得て、口頭発表12件、ポスター発表は初日20件、2日目68件であった。三間センター長より、3月末をもってセンターが改組され、10年時限の新たな組織として再出発するとの挨拶があり、引き続き、山中教授より、その内容の詳細な説明があった。

午後の講演では、同時期（2/7～2/17）にセンターとJSPS（日本学術振興会）が主催していた「アジア学術セミナー」の受講生43名も加わり、多数の聴衆を得て、B. Remington（米、ローレンス・リバモア研）の特別講演「実験室宇宙物理」が行われた。この時期、本誌の記事にもあるように同名の実験が激光XII号で挙行され、Remington氏は共同研究者としても来日、実験に参加した。4日間でのとんぼ返りは、学生時代アメフトで鍛えた190cmはある彼の体にもさすがにきつかったと、帰国後の電子メールにあった。

最後に、忙しい時期にシンポジウムに積極的に参加いただいた共同研究者の皆様に感謝すると共に、改組後のセンターの共同研究が、皆様とセンターにとってより実りのあるものに成長していくことを願って簡単な報告を終えたいと存じます。